

第 78 回 卒業式 校長のことば

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。保護者の皆様、お子様の高校ご卒業、心よりお祝い申し上げます。

本日は、PTA会長関島茜様をはじめ、学校運営協議会委員の皆様、本校同窓会鳩友会の皆様、本校旧職員の皆様、PTA本部役員の皆様をご来賓としてお迎えし、第 78 回卒業式をこのように盛大に挙行できますことを嬉しく思います。

先週、完成した卒業アルバムを見ました。皆さんが上溝高校に入学した令和 5 年 4 月はまだコロナ禍で、入学式では皆さんはマスクを着けていましたね。あの頃は「ソーシャル・ディスタンス」の名のもと、密を避け、人と距離を取ることが求められていました。人との物理的な距離を意識するうちに、精神的な距離も広がってしまったと感じた人も多かったのではないのでしょうか。入学後ほどなくして行動制限は解除され、皆さんは日常生活を取り戻しました。しかし、それは単にコロナ前の生活に戻ったということではなかったと思います。コロナ禍の 3 年間で人と距離を取ることが求められながらも、人と関わることの大切さを自覚し、その在り方を模索し続けた皆さんだからこそ、日常生活を取り戻した後には、仲間との関係をより優しく、より強く築くことができたのではないのでしょうか。苦難にめげることなく、工夫を凝らして乗り越えてきた皆さんが築き上げた「上溝高校 78 期生」という人間模様。卒業アルバムにはそんな皆さんの優しさやたくましさや溢れていると感じます。そして、そんな皆さんなら、きっとこれからの人生もしなやかに、そして力強く生きていってくれると思っています。自信を持って前に進んでください。

話は変わりますが、去る 2 月 22 日に閉幕したミラノ・コルティナオリンピック。日本人選手は冬季オリンピックで過去最多の 24 個のメダルを獲得しました。開催期間中は、選手たちの活躍の様子が連日メディアで報道されていました。皆さんと同年代の 10 代の選手もたくさん活躍しましたね。見事金メダルを獲得して表彰台の真ん中で喜びを爆発させる選手の姿は人々を大いに感動させました。それと同時に、目指した色のメダルが取れなかった選手、また惜しくもメダルには届かなかった選手にも人々は大きな、温かい拍手を送りました。

スポーツに限らず、すべての人に望んだ結果が約束されている訳ではありません。予期せぬ不運に見舞われることもあります。自分の最善を他者が越えることもあります。どれだけ努力しても願いが叶わないこともある。だからこそ、努力すること自体が尊いのだと思います。本気で努力してきたからこそ「悔しい」という言葉に重みがあるのだと思います。

結果は平等ではないかもしれない。でも努力する機会はすべての人に平等に与えられています。皆さんもこれからの人生、自己実現のために惜しむことなく努力し続けてください。

さて、皆さんが 3 年間で過ごしたこの上溝高校は、皆さんにとってどのような学校だったでしょうか。私も昨年 4 月の着任以来、その答えを探し続けてきました。たどり着いた答えは「学校らしい学校」です。上溝高校は普通科の高校であり、様々な活動にバランスよく取り組んでいます。学校として何か特定の活動に特化している訳ではありません。それは、裏を返せば、何でも受け入れることができる、自分が望みさえすれば何にでも挑戦することができるということです。つまり多様なものを受容する力があるのです。多様な個性が集まり、互いを受け入れ、尊重しながら過ごした上溝高校で

の3年間。そこで育んだ寛容の精神は、「分断の時代」と言われる今を生きるのに最も必要な力です。これから皆さんが生きていくそれぞれの人生において、その寛容の精神を遺憾なく発揮してほしいと思います。

結びに、今日上溝高校を巣立つ78期生の皆さんに、はなむけの言葉として本校の校訓を贈ります。

「獅子のごとく勇気をもって進め、撫子のごとく真心をもって歩め」

時には走り、時には歩き、またある時には立ち止まり、勇気と真心を持ってそれぞれの人生を進んでください。これからの皆さんの人生に幸多きことを願っています。卒業おめでとう。

令和8年3月3日

神奈川県立上溝高等学校

校長 林田裕之